

銀杏の俎板

二三年前、家を建て直した。東京で定年を迎え、老後を故郷で過ごすつもりというのが夫の念願であった。

それまで無人であったから、廢屋に近かったし、家財も目ばしいものは、殆ど盗難にあっていた。それでも家を壊すとなると、一応物置を建て、古い道具などを収納することにした。

「これは、銀杏の俎板じゃ。俎板には銀杏が一番じやって」

加勢に来ていた近所の旦那が手にしていた板を差し出して言っ。

それは厚さは五センチほどの黄色味を帯びた艶やかな板で、幅は普通の俎板だが、長さは90センチ程もある。俎板の脚は二の字にはめ込んであるものと思っていたが、それは10センチもの高さの

四本脚で、一本が欠けている。裏返すと脚の間に深い切り傷が何本も走っている。

「この裏の傷は鶏をつぶした時のものさ。昔は何かというと鶏をつぶしたものだ」

と夫が言っ。現在の流しには脚のある俎板は使えない。それはそのまま物置の奥に仕舞い込まれた。

台所を与かる者として、俎板は重要な道具である。結婚してから三枚ほど買換えたであろうか。買ったときは包丁もそうであるが、懐の許す限り上等の物を選ぶことにしている。

もつ十年前程前に、デパ・トの木曾物産の販売で、さわらの細かい柃目の俎板を買った。五、六年の間に真ん中が少し凹んできた。両端も黒ずんで、削りなおせばよいのだが、大工さんなど知り合いもない都会のこととて、そのまま使っていた。

その頃、二人目の孫が生まれるという次男坊夫婦と同居することとなった。私は情報処理の技術者としてハードな勤務を続けていたので、出産後三カ月もすると、家事の殆どは嫁さん任せとなり、私

の担当は休日の夕食の支度くらいとなった。

ふと気がつくとも組板が白いプラスチックのものになっていて、食器戸棚には白いレ・スの紙が敷かれたりして、忙しいままにずぼらになっていたわが家も整理されてきた。

プラスチックの組板は、前のものより小ぶりで、薄いのがたよりない感じであったが、凹んでいるものよりは切りやすいように思われた。

しかし使っているうちに細かい切傷が、だんだん薄汚い色になってきた。漂白すれば一時はよいのだが、ステンドレスの流しには漂白剤を度々使つことは差し控えたいと思った。

鹿児島島に帰る時が来て

「古い組板は何処かしら」

と嫁さんに聞くと、外のガスのメーターにはさんであると言つ。見ると四、五年も外に放置されていたので、削りなおしても使い物になりそうもなかった。結局何かのおまけに貰つたプラスチックのものを使つことにしたのだが、それも二年とも

なると薄汚れが消えなくなってきた。

一この十月初旬、佐賀吉野ヶ里で開催された九州物産展を見学する機会に恵まれた。各県各地の特産品を味見したり眺めて歩いた。あるテナントに宮崎の木工品が展示されていて、ふと見ると「いちよつこのまな板」とあり、大小の組板が売られていた。

「これは五千円で売りたい品物ですが、四千円でいいですよ」

と木工品店の亭主らしい人がいう。手にとると思いのほか軽い。記念にと手頃な大きさのものを買った。

早速、翌日から使い始めた。やはり木の感触は素晴らしい。銀杏は水切れもよく滑らかで、厚みからの安定感もある。今、私は銀杏に納得して、大満足なのである。

（平成七年十一月 鹿児島島新報）